

テキストから見た日本語の人称

—日本語の小説における人称表現とその階層性—

野村 眞木夫*

(平成20年9月30日受付；平成20年11月10日受理)

要 旨

本稿は、日本語の人称表現の多様性を確認し、これが人称の観点から類型化した小説においてどのように使用されているかを考察するものである。人称制限との関係、文末の無標/有標の選択、テキストの参加者が中心のか周辺のか等を観点としてテキストを観察し、名詞類の階層性に関する先行研究を参照しながら、日本語の人称表現に使用される名詞にも類似の階層性を仮定し、日本語の人称空間を提案する。

KEY WORDS:

人称 Person

テキスト Text

小説 Novel

名詞の階層性 Hierarchy of nominals

コミュニケーションの参加者 Participants of communication

テキストの参加者 Participants of text

1. 本稿の目的及び問題提起

日本語に人称の範疇を仮定することは、人称名詞¹⁾の用法や敬語の人称の体系、人称制限の現象等を根拠として認めることができる。そこで、日本語に人称の範疇を仮定するとして、それがテキストまたは部分テキストのレベルでどのような振る舞いを示すのか、人称制限の現象を別とすればこれまでに詳細な検討が行われているとは言いがたい状況にある。本稿では、現代日本語による小説をテキストとして、これを組織する人称の組み合わせの型と各人称の主体の属性、人称を基準としたテキストに見いだされる関係性や類型性のありよう、すなわち人称空間をどこまで明示しうるのかを探ることを目的とする。

日本語のテキストにおける人称の組み合わせを基準として取りだした人称制限にかかわる文末の様相の示す傾向と、言語類型論において仮定されている名詞の階層性とを照らしあわせながら、部分テキストにおいて人称を基準とした階層性をとりだし、テキストを理解する方法とテキストの組織を相関させることによって、上記の問題を探る。

2. 日本語のテキストで使用される人称表現の種々相

まず、上記の問題を明らかにする基準として、取りあげるテキストおよび部分テキストを小説のジャンルに限定し、人称の組み合わせを規定しておこう。部分テキストは、小説のテキストにおいて、ある時間の継起的連続と場所および参加者が一貫して維持される場面によって規定されるものとする。しばしば、章・節や何らかの符号、空白行などによって明示的に区切られる。日本語の人称に、一人称・二人称・三人称をみとめることとするならば²⁾、その組み合わせは形式的に[表1]のようになる。表中、“1”はその人称が当該のテキストの地の文に出現し、“0”は出現しないことを意味する。

[表1] テキストにおける人称の組み合わせ

人称	A	B	C	D	E	F	G	H
一人称	1	1	1	1	0	0	0	0
二人称	1	1	0	0	1	1	0	0
三人称	1	0	1	0	1	0	1	0

ただし、この組み合わせのうち、テキストまたは一定の規模をなす部分テキストにおいて現実に認められる組み合わせの類型は、A・C・E・Gの4種類である。Hは具体的な参加者が認められない類型なので本稿の対象でなく、またB・D・Fの類型は、小説の部分テキストとして現実には認めにくい類型である。

以下にA・C・E・Gの各類型の例を取りあげ、各人称の表現方法を観察しよう³⁾。4種類のタイプの別は、各用例の末尾の出典の最後にアルファベットで記入する。ただし、「C [E]」のように記したものは、テキスト全体がCとEのタイプからなっており、引用した部分テキストがCのタイプであることを意味する。

- (1) 私は友達に誘われて「エグジット・ミュージック」へ行くようになった。多分二回目か三回目の時だったと思う。話の合間にふと気がつくとななたが奥のカウンターに近い椅子席から、突き刺すように私を見ていた。私は銚子のように打ち込まれたその視線から逃れようと、横を向いたり、一緒にいる友達と目を合わせたり、煙草で煙幕を作ったりしたのだが、あなたは私を見続けた。私はあなたの顔をよく見るができなかった。
「ね、見られてるよ？」あなたに気がついた友達が言った。(糸山秋子『袋小路の男』講談社：9f：A)

(1)は類型Aである。一人称・二人称は、それぞれ人称名詞で記述されており、三人称者は普通名詞によっている。視線の交錯が表現されているが、一人称者と二人称者による複数の視線を基準としたダイクシスの中心は一人称者に置かれている。

- (2) 秋晴れの午後、公園のベンチに腰かけて文庫本を読んでいたのだが、そのうちうつらうつらしたらしい。
あのう、すいませんが、という声に眼が醒めた。眼の前に、車椅子に乗った、小柄なおばあさんがいた。あなたのご本がそこに落ちてしまっただけ。なるほど、いねむりをしたので、文庫本を地面に落とした。どうもありがとうございます。礼を返すと、おばあさんは、じつは頼みがありましてといった。あそこにアリンコが集まっているか教えてほしいんです、わたくし眼が弱くなって、アリンコがアソコにもういっぱいいたかっているように見えるんですが。彼女は右手で一〇メートルほど先にある松の木の下を指した。
蟻の動きが変なのだろうか。おばあさんは自動の車椅子を動かして、松の木に近づいた。私は文庫本を拾って、彼女の後を歩き、松の木の根元を覗き込んだ。(松山巖「蟻」『猫風船』みすず書房：101：C)

類型Cの(2)は、一人称・三人称がテキストの参加者であり、直接引用の文を除き二人称名詞は認められない。おばあさんの発話が直接引用表現とされた文で一人称名詞は「わたくし」であるが、地の文の語り手と一致する一人称者は「私」として表記し分けられている。三人称者は同一の対象が「おばあさん」と「彼女」で記述されている。「おばあさん」は対象の属性を意味素性として内在することで、そのような素性を欠く「彼女」と区別される。「おばあさん」がここで親族名称ではなく、普通名詞としての用法であることは、明らかである。

次の(3)と(4)は、同じテキストからの引用であるが、このテキストは類型Cの前章と類型Eの後章に分かれている。(3)は前章、(4)は後章の部分である。

- (3) もう十年になる。あれ以来、私のひとり歩きの楽しみも、いくらかセーブされた。とくに基地周辺では用心せざるをえなくなった。独身ならまだしも気楽なものだが、「子どもには責任をもってよ」と妻はいうのだ。用心するにこしたことはない。戦前なら、沖縄の島のなかで、どこの辺地へ行こうと安穏なものだったが、もうそういう世間ではなくなったのだから。ハウスで働いているメイドたちはどうなのだろう。ガードなどはライフルを持っているから怖くないだろうか。(大城立裕『カクテル・パーティー』文藝春秋：184f：C [E])

- (4) その蒸し暑い夜、たぶんお前がミスター・モーガンの幼い息子を探しあぐねて、家族部隊の金網の内側で孫氏の思い出話をきいていた時分に、M岬でお前の娘の身の上の事件は起こっていた。
お前がパーティーから微燻をおびて帰宅したとき、娘はもう床をとって横たわっており、妻が緊張した表情でお前を迎えた。妻は、娘が脱いだ制服をお前に示した。ところどころが汚れ破れていて、それだけでもうお前は大きな事故がおこったことを理解させられた。(大城立裕『カクテル・パーティー』文藝春秋：210f：[C] E)

(3)の「私」は、(4)では「お前」で表現されている。親族名称「妻」の表現は前章・後章で一貫している。「妻」との関係性が、前章の「私」と後章の「お前」とで同一だからである。後章の「娘」は前章では(3)の部分で「子ども」として言及されるのみであり、前章において取りだすべき特徴は見いだされない。後章において「娘」はほぼ一貫して親族名称の「娘」によって言及されるが、(5)の部分で例外的に「彼女」による言及がみられる。

- (5) ただお前はまだ気づいてはいなかったが、娘はなんのためにお前の二十年前の罪をあがなって苦しまなければならないのか。おそらく娘もそのような理屈に気づいてはいまい。彼女にとっては、これからさきどれだけかつづく苦しみの重みだけが問題であって、その理屈などどうでもよいのだ。だが、お前はそれを考えなければならない。ふたつの裁判に娘は敗れるであろう。それまでの娘の苦しみのなかにお前は分けいって、それを考えるべきだ。いま娘が実験をやりなおしやりなおしたしかめているものが何であるのか。それが、娘の苦しみやお前の昔の罪やいまの怒りと、どのような形でかわりあうのか。娘のひとつひとつの動作のなかから、それを探っていかなければならないのだ……

お前はまだそれに気づいていない。[以下省略] (大城立裕『カクテル・パーティー』文藝春秋：257f：[C] E)

後章で、「娘」は父親である「お前」にとって理解を越えた言動をする主体として描写されている。娘の内面が表現されるのは、(5)の前半だけだが、その内面における「理屈」は、このパラグラフの冒頭の「お前はまだ気づいてはいなかった」と後続パラグラフの冒頭の類似の表現「お前はまだそれに気づいていない」によって、「お前」の認知からも排除されているのみならず、「おそらく娘もそのような理屈に気づいてはいまい」により、娘自身による明確な認知が排除されている。その気づきの否定の叙述表現は「お前」に対しては確言だが、「娘」に対しては概言が選択されている。娘が「彼女」で言及される文では、娘にとっての「理屈」のありようが説明されている。この説明は娘の内面にに関わり、娘の思考を描出する度合いが前文よりも高い。

次が類型 G の例である。各参加者は、人称名詞の他に、固有名詞、親族名称、普通名詞、再帰代名詞で記述されている。

- (6) 母はどうしても二人を呼びたいらしい。多実子の感情はだんだん意地わるくなってきた。本当は、母は二人を呼びたいのではなくて、ただ章之介だけに会いたいのだ。母には章之介と自由に会える機会はない。法事を口実にして、小松鉄太郎を呼ぶことも口実にして伊原章之介に会いたがっているに違いない。多実子は腹のなかで熱くなってくるような気がした。母を章之介に会わせるくらいなら、自分は小松鉄太郎に会わなくてもいいから、母の邪魔をしたかった。嫉妬かも知れない。しかし彼女は嫉妬であるよりも、正義だと思っていた。

夫人はふと前かがみになって、小さい声でささやいた。

「本当を言うとね、何も二人をお呼びしなくてもいいのよ。だけど、あんたの縁談のこともあるでしょう。伊原さんに会える機会があったら、なるべく沢山会っておいた方がいいと私は思うの。少々のお金には替えられないわ。そうでしょう？」

(石川達三『自分の穴の中で』新潮文庫：39：G)

- (7) 小松鉄太郎は墓地をとりかこむ生垣のうしろにたたずんで、遠くから多実子を見ていた。黒い服をきた彼女のすがたは、清潔でつめたかった。いましがた伸子夫人は(あなたの決心次第だわ)と言ったが、どう決心したらいいのか見当がつかなかった。むしろ、どんな風に決心しても手のつけようが無いような気がした。だめにきまっているのだから、始めからあきらめた方がいいのだと、彼は思いたかった。しかし、今まで一度もそんな話をしたことの無い伸子夫人が、なぜ今になってあんな事を言いだしたのか、その真意がわかりかねた。

(石川達三『自分の穴の中で』新潮文庫：78：G)

願望表現の文末の無標形式と有標形式の様相から、部分テキスト(6)では多実子、(7)では小松鉄太郎が語り手による内部観察の中心となる参加者であることが理解される。それ以外は周辺的な参加者として位置づけられる。所有者を顕在させない親族名称「母」は、多実子との関係性において「伸子夫人」を指示するときに使用されるのであって、多実子を周辺に位置づける(7)では有効性をもたない。

以上、A・C・E・Gの各類型から、テキストの参加者を記述する表現をとりだした。その記述は、地の文において、人称名詞、固有名詞、親族名称、普通名詞、再帰代名詞によって表現されており、個々のテキストの特性に応じ、複合的に使用されている。次節では、この表現の使用の複合性に注目し、その複合性とテキストの類型性との関連を考察する。

3. 人称表現の多様性とテキストのタイプ

野村(2007, 2008)では、日本語に認められる人称制限の現象を分析することをおして、願望表現と感情表現の叙述表現、すなわちそれが文末となるばあい無標と有標を規定し、その無標形式と有標形式の使用とテキストの人称の組み合わせから類型化したタイプとが相関する傾向をみとめている。願望表現について規定するならば、「動詞

+タイ」や「動詞+タカッタ」の形式を無標形式、他のモダリティ表現をともなう形式や「ガル」が付加される形式等を有標形式とみなす。他の感情表現もこれに準じる。この形式の種類と、テキストを人称の組み合わせによって類型化したタイプとの相関の傾向をまとめると〔表2〕のようになる。A・C・E・Gは、〔表1〕として先に類型化したテキストのタイプの区分である。三つの人称は願望表現と感情表現の経験者格として選択される。各類型において、経験者格の人称に応じ、叙述表現に無標／有標のどちらが選択されるかの傾向を示したものである。

〔表2〕 願望表現・感情表現の叙述表現の傾向

人称	A	C	E	G
一人称	無標	無標	0	0
二人称	有標	0	無標	0
三人称	有標	有標	有標	無標／有標

この表の意味するところは、次のように理解できる。まず、類型A・Cの一部⁴⁾と、類型E、Gで二人称または三人称が無標となる表現は、野村(2000)で描出表現と呼んだ類型に該当する。描出表現とは、いわゆる体験話法、自由間接話法、描出話法に対応するもので、「と」などによる明示的な引用の標識が欠けているか、その作用範囲のそとで、コミュニケーションの参加者と区別されるテキストの任意の参加者の発話や思考の内容を対象とし、コミュニケーションの参加者のたちばかりからテキストの参加者をさししめすモードで表現する類型である。このことを、語り手を含むコミュニケーションの参加者とテキストの参加者が相互に表現に言及する関係性が成立しているものと理解するならば、〔表2〕で無標となっている項は、コミュニケーションの参加者とテキストの参加者が表現対象としての発話や思考に言及する様相が近接していることによると判断できる。その近接する項は、一人称を内在する類型(A、C)のテキストでは一人称であり、これを内在しないばあい、二人称を内在する類型(E)では二人称、二人称を内在しない類型(G)では三人称である。ただし、Gのばあい、無標になる参加者と有標になる参加者とが区別されるが、これは、任意の部分テキストにおいて中心的に言及される参加者が無標、周辺的に位置づけられる参加者が有標で表現されるということである(野村2008)。

この傾向は、Kuno and Kaburaki(1977)が提案した、(8)に示す「発話行為参加者の共感階層」と対応する。

(8)⁵⁾ Speech-Act Participant Empathy Hierarchy (Revised)

It is easiest for the speaker to empathize with himself; it is next easiest for him to empathize with the hearer; it is most difficult for him to express more empathy with third persons than with himself or with the hearer:

Speaker > Hearer > Third Person

(Kuno and Kaburaki 1977 : 652)

(8)の“Speaker”を一人称、“Hearer”を二人称とし、“Third Person”に中心的な参加者と周辺的な参加者とを包含することで、〔表2〕の無標形式が選択される順位と(8)の階層とをむすびつけることができる。

ところで、Kuno and Kaburaki(1977)は言及していないが、人称代名詞の階層的な位置づけを含む名詞類の尺度化をはかった提案として、Silverstein(1976)が著名であり、さらにSilversteinやKuno and Kaburakiを参照しながら、Zubin(1979)やDixon(1979)による類似の提案がある。

Zubin(1979)は、談話において言及される実体が主格に入る可能性は、その実体が話し手からどれほどの自己距離(Ego-Distance)にあるかの関数だとみなし、これを定義する「自己中心尺度(Egocentric Scale)」を(9)のように規定した。(9)のはじめの3項は(8)と対応し、“central”と“peripheral”の下位区分は、上で述べたテキストの中心的な参加者と周辺的な参加者の区分と対応する。

(9) Egocentric Scale :

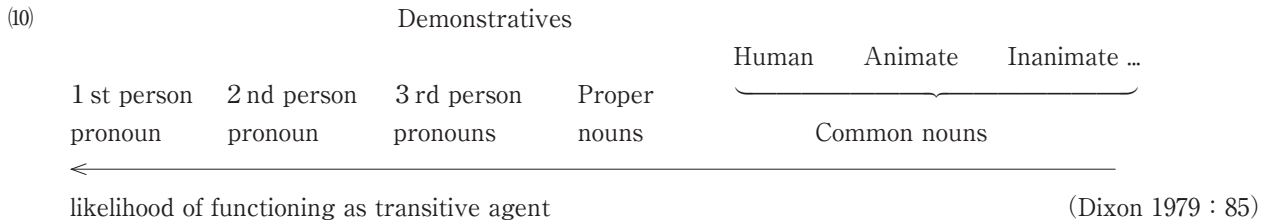
speaker > hearer > other human > concrete > abstract > abstract

(inanimate) human
 central > peripheral

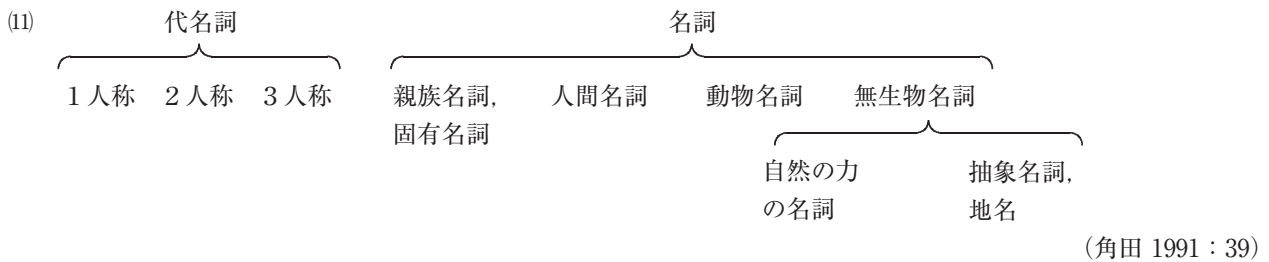
(Zubin 1979 : 495)

Dixon(1979)は、「動作主の可能性」の尺度として、(10)を規定する。左のものほど他動的な動作主として機能す

る可能性が高いというのである。(10)の各項の範疇は、表面的には(9)の意味論的な範疇を文法論的な範疇に置き換えたものとして理解することができる。



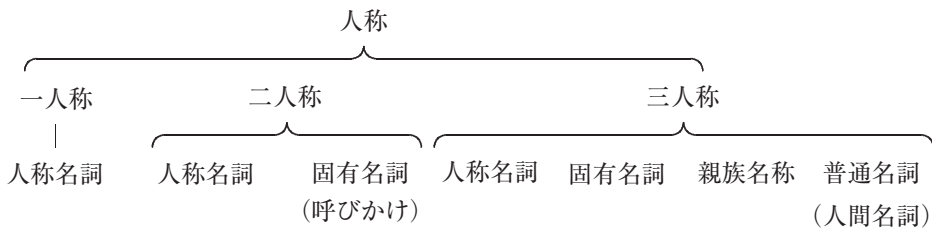
これらの先行研究を参照しながら、角田太作（1991）は「名詞句階層」を(11)のように一般化して示す。



これらを参照するとき、[表2]全体と(8)の階層が対応し、また[表2]Gの「無標」と「有標」が(9)の“central”と“peripheral”にそれぞれ対応を示していることが予測される。さらに、先に挙げた例に出現していた人称名詞のみならず、固有名詞、親族名称、普通名詞のありようにもなんらかの階層あるい尺度を導入する余地のあることも予測される。なお、ここまで普通名詞として言及してきた表現は、角田の人間名詞に相当するので、以下「普通名詞（人間名詞）」と記すこととする。

ただし、人称そのものは抽象的な範疇であり、これが人称名詞・固有名詞・親族名称・普通名詞によって表現される。それゆえ、上記の(9)(10)(11)は、さしあたり次のようにとらえなおしておくこととする。本稿でとりあげる日本語の小説のテキストの地の文では、一人称は人称名詞、二人称は通常の指示では人称名詞、呼びかけのばあい固有名詞で表現されるのが一般的である。三人称は人称名詞・固有名詞・親族名称・普通名詞（人間名詞）など多様である。このことをまとめて示すと(12)のようになる。これが小説の地の文における人称表現のパラダイムである。

(12) 日本語の小説の地の文に使用される人称表現



テキストの中心的な参加者と周辺的な参加者の区分は、これらが運用されているテキストの水準で作動する範疇であり、人称制限や敬語の人称も、テキストや談話の水準で複合的に作動する。次節では、テキストの類型別に、人称表現がどのように選択されているか、テキストの参加者が中心的か周辺のか、人称制限または文末の無標形式と有標形式の選択がどのようにそれらの区分と関わっているかについて具体的なテキストに即して検討していく。

4. 日本語の小説における人称表現の組み合わせ

本節では、日本語の小説の地の文に使用される人称の表現の方法を検討する。あらためて(12)の意味を規定しておくことと次のようになる。まず、前節で[表2]と(8)から、一人称・二人称・三人称の間には、コミュニケーションの参加者、つまりテキストの語り手と読み手と、テキストの参加者、つまりテキストの登場人物の人称性との間に、言及の

しやすさの様相が区別され（野村 2000：324 以下）、これが(13)の階層をなしているということである。

(13) 一人称 > 二人称 > 三人称

そうすると、問題は、着目したテキストがどの類型か、テキストの参加者が中心的か周辺的か、文末が無標形式か有標形式か、また〔人称名詞・固有名詞・親族名称・普通名詞（人間名詞）〕の表現形式がこれらとどのように関連しているか、という点に集約される。野村（2000：329（8b））では、(14)の規則を仮定したが、この規則について、人称表現の観点から検討を加えることになる。その結果、各人称表現の間に一定の関係性や階層性が見いだされるのであれば、これを日本語の人称空間として仮定する。

(14) コミュニケーションの参加者とテキストの参加者がテキストに言及する様相に応じて、表現類型が産出される。

4.1 類型C

類型Cの人称の組み合わせは、すでに(13)で認められた階層性に還元される。(15)では、一人称者は「私」で一貫するが、三人称者は、三人称名詞、固有名詞で表現されている。同じテキストからの引用(16)では、三人称者が親族名称で表現されている。(15)(16)の「私」および「彼女」「麻里」「娘」は、それぞれ同じ対象である。波線部は願望表現であるがいずれも(13)の階層性に抵触しない。

(15) その心理は、ちょっと、説明しにくいですが、私は、麻里のために、母親を捜してやろうと、思ってるくせに、一方、細君を貰うことが、子供に済まないような、気持があった。だからといって、麻里に隠れて、コソコソと、結婚しようという気持ではなく、また、そんなことが、できるわけもなかった。ただ、私は、たとえ、幼い麻里であっても、ある納得を与えてやりたかった。それは、私の口から、私の好む方法で、私が妻を娶り、彼女に母が来ることを、告げたかった。それまでは、彼女に、無用な印象や、想像を起すことを、避けたかった。その意味で、彼女が、私の身辺にいないことが、有難かったのである。

（獅子文六「娘と私」『獅子文六全集 第6巻』朝日新聞社：296：C）

(16) 数日中に、新宿御苑も、宮内庁関係を離れて、公開されるので、その名残りのように、そんな催しが、行われたらしかった。私は、御苑も、宮中の舞楽も、まったく知らないので、行く気になったのだが、後者の方の価値は、見当がついてるので、そういうものを、娘に見せておきたかったのである。〔中略〕

私は、娘に、母国の持つてゐる立派なものを、見せるのが、何か、いい気持ちだった。能も、文楽も、みんな、見せてやりたかった。

（獅子文六「娘と私」『獅子文六全集 第6巻』朝日新聞社：480：C）

4.2 類型Aと類型E

類型Aと類型Eは、組み合わせられる人称のなかに二人称を含む。

まず、[表2]から、二人称者と一人称者および三人称者との間の階層性は明確である。つまり、類型Aにおいて、二人称者が人称名詞と固有名詞のどの語句で表現されるか、また、三人称者が人称名詞と固有名詞、親族名称、普通名詞（人間名詞）のどの語句で表現されるかにかかわらず、コミュニケーションの参加者は、二人称者より一人称者、三人称者より二人称者のほうが言及しやすいのである。したがって、一人称者・二人称者・三人称者の関係は、それぞれを表現する名詞の表現形式を考慮することなく、先に示した(13)の階層性に還元されるわけである。

そこで、検討すべき問題は、類型Aと類型Eにおいて、二人称者であるテキストの参加者が人称名詞と固有名詞とで表現されうるとして、そこに何らかの階層性が認められるかどうか、ということに集約される。

(17) ああ、これだ、とおまえは思う。まるごとの風景が自分の中に飛び込んでくる、あのときの、あの感覚と同じだ。鬼ケンの顔が浮かんだ。アカネの顔と、赤い下着に包まれた尻が、浮かんだ。

おまえは数えることのかなわない雪をまなごしいっぱいに受けながら、少しだけ泣いた。

シュウジ。

おまえの物語は、「にんげん」のために初めて流した、その涙で始まる。

（重松清『疾走』角川書店：21f：[A] E）

(18) わたしは思うのだ、シュウジ。

徹夫に二万円を返し、我が家に向かって歩きだしたとき——おまえは、すでに、物語の閉じ方を決めていたの

だろう。

(重松清『疾走』角川書店：484：A [E])

同じテキストからの引用であり、ともに二人称者「おまえ」、すなわち「シュウジ」への呼びかけ表現がある。しかし、人称の組み合わせの観点からとらえなおすと、(17)は類型E、(18)は類型Aの部分テキストである。(17)では、二人称者が思考の主体となっていて、思考の対象は、引用構造の外部で描出されている。語り手の人称は認められない。これに対し、(18)では、語り手が一人称者として顕在しており、「おまえ」の判断は一人称者である語り手から推測される対象となっている。「思う」の主体も、(17)と(18)の間で切り替えられている。

いずれにおいても二人称者の固有名詞「シュウジ」は、地の文において呼びかけとして使用されているにとどまり、叙述表現に対応する提題表現あるいはその他の格成分としての使用は、このテキストでは認められない。提題表現等としての使用は、二人称名詞、(17)(18)では「おまえ」に限られている。この傾向は、他のAおよびEの類型の小説の地の文において同様に認められる。

このことは、小説の表現の傾向としてそのように認められるのであり、したがって文体論の水準で理解するならば、個々のテキストの文体の様相⁶⁾に応じて異なりが生じうる。一例をあげよう。

(19) 「もう二三日したらお父様がいらっしゃるわ」

或る朝のこと、私達が森の中をさまよっているとき、突然お前がそう言い出した。私はなんだか不満そうに黙っていた。するとお前は、そういう私の方を見ながら、すこし腹が膨れたような声で再び口をきいた。

「そうしたらもう、こんな散歩も出来なくなるわね」

「どんな散歩だって、しようと思えば出来るさ」

私はまだ不満らしく、お前のいくぶん気づかわしそうな視線を自分の上を感じながら、しかしそれよりももっと、私達の頭上の梢が何んとはなしにざわめいているのに気を奪られているような様子をしていた。

「お父様がなかなか私を離して下さらないわ」

私はとうとう焦れたいとでも云うような目つきで、お前の方を見返した。

「じゃあ、僕達はもうこれでお別れだと云うのかい？」

「だって仕方がないじゃないの」

そう言ってお前はいかにも諦め切ったように、私につとめて微笑んで見せようとした。

(堀辰雄「風立ちぬ」『風立ちぬ・美しい村』新潮文庫：79：A [C])

(19)はAの類型の部分テキストであるが、一人称者、二人称者ともに外部観察による客体化された描写がなされていると理解することができる。一人称者の表現について「不満そうに」「不満らしく」「……様子をしていた」のような様態、モダリティ、客体的な観察の表現が選択されている。二人称者については、外部観察による描写が行われている。そのようにして、両人称を類似の様相で描写することで、人称のいかにかわらず対等に客体化する表現方法が選択されているわけであり、これはこのテキスト独自の文体論的な選択だとみなすことができる。

以上のことから、二人称名詞と二人称者を指示する固有名詞の関係は、二人称名詞が叙述表現に対応する提題表現や格成分として使用され、固有名詞は呼びかけに特化して使用される、という一般的な傾向を認めることができる。野村(2005)は、二人称名詞を提題表現とする文が描出表現の類型性をにないうことを明らかにしており、その意味において、この種の文はコミュニケーションの参加者とテキストの参加者が相互に言及する類型である。これに対し、二人称者を指示する固有名詞の使用が呼びかけに限定されるということは、語り手からその二人称者に対してのみ有効なコミュニケーションにおける使用だといってよい。

本節の議論によって、次のような階層性を、小説のテキストの観点からとらえた傾向として認めることができる。

(20) 二人称名詞 > 固有名詞 (呼びかけ)

4.3 類型G

次に、類型Gのテキストを考える。ここでは、人称名詞・固有名詞・親族名称・普通名詞(人間名詞)の表現を総体的にとりあげることがもとめられる。類型Gでは、テキストの参加者は多く人称名詞または固有名詞で指示される。

はじめに、三人称名詞で指示されるテキストの参加者が、願望表現の経験者格となっている例を観察する。

(21) 伸子夫人ははじめから、娘の抵抗を予定していたに違いない。予定しながら押し切ろうとするところに、夫人

の複雑な辛さがあった。

彼女は小松鉄太郎に会いたい。縁談というほど正式なかたちになっていないが、彼女の感情のなかでは一つの目標になっていた。

しかし多実子は、自分が鉄太郎を目標にしているということを、母や兄に知られたくない気持ちだった。自分が鉄太郎の妻になるということに、彼女は一種の侮辱を感じる。

(石川達三『自分の穴の中で』新潮文庫：36：G)

22) 本当は彼は弟と胸襟をひらいて語りたかった。弟がどんなに酔っぱらっても、思う存分酔わしておき、その呂律のあやしい懐かしい故郷の言葉を聞き、自分もその故郷の言葉で応じたかった。徹吉は以前、実母が死んだとき帰省して以来、ずっと故郷を訪れたことがなかった。だが、彼もまた特殊な立場にしばられている存在である。そうした個人的な願望は楡病院の記念の晩餐に対しては席をゆずらなければならない。そのことを徹吉はよく理解していた。なにはともあれ彼は、山形の僻村を離れて、東京に、楡病院に、すでに二十年余をすごしてきた人間なのだ。

(北杜夫『楡家の人びと』新潮文庫：上73：G)

23) 加藤の人生は、彼が人の親となったその日からまた変った。彼は一晩中眠ってはいなかったが、花子の出産が済むと、一時間おくれて会社へ出勤した。彼は父となったことを同僚に発表したかった。

(新田次郎『孤高の人』新潮文庫：下266：G)

(21)のテキストは、全体テキストでは場面によって中心的な参加者が変動するが、引用した部分テキストにおいては多実子が中心的な位置を占めている。「彼女は小松鉄太郎に会いたい」の三人称名詞は多実子を指示し、願望表現の対象としての人物は固有名詞で表現されている。この願望表現の文末は無標であり、周辺の参加者を主題とする第1文で「伸子夫人は……違いない」のように文末に認識のモダリティ表現が選ばれた例とは区別される。

(22)も(21)のテキストと同様、場面によりどの参加者が中心的な位置を占めるかは変動する。この部分テキストでは、第1文の三人称名詞の彼、すなわち徹吉がそれに該当し、「彼は弟と胸襟をひらいて語りたかった」のように親族名称で指示される人物への願望が無標の形式で表現されている。

(23)の「彼は父となったことを同僚に発表したかった」では、無標の願望表現の経験者が三人称名詞、願望の行為の相手が普通名詞「同僚」で表現されている。彼すなわち加藤がこの部分テキストの中心的な参加者である。

このように、類型Gのテキストの参加者が三人称名詞で指示されているとき、他の参加者を指示する表現のいかんにかかわらず、三人称名詞の参加者が無標の願望表現の経験者として運用されている例を取りだすことが可能である。このかぎり、コミュニケーションの参加者は、テキストの参加者を固有名詞・親族名称・普通名詞で表現するよりも三人称名詞で表現するほうが、願望表現の類型を無標で表現する様相が高い、と判定できそうである。

ただ、すでに上の3例で確認してきたように、ここで三人称名詞で表現されている参加者は、テキストまたは部分テキストで中心的な位置づけがなされている参加者である。次にあげる固有名詞と親族名称あるいは普通名詞の組み合わせの例も同様である。それぞれ、固有名詞で指示される参加者がこの部分テキストでは中心的に位置づけられていて、そのことと文末の無標とが対応するのである。

固有名詞と親族名称および普通名詞との階層性を判定する例を検討しよう。

24) 「菊。節は曲げるなよ」

それは貞行がよく父に言われた言葉である。今の世に受け入れられない信仰を持っている少教のキリスト教徒が、貞行には尊敬すべき人々に思われた。自分がその信仰は持ち得ないにしても、最愛の妻にはその道を全うさせてやりたかった。

(三浦綾子『塩狩峠』新潮文庫：51：G)

(24)では、願望表現の経験者が固有名詞(貞行)で表現され、そのはたらきかけの相手が親族名称で表現されている。すなわち「(貞行) 妻にはその道を全うさせてやりたかった」となる。この例では、固有名詞が親族名称よりも上位の階層にあると判定される。(21)と同じテキストに現れる(25)(前掲(6)の前半)の例でも同様の階層性が認められる。角田(1991)では、固有名詞と親族名称は同じ階層に位置づけられているが、本稿の資料では、ここに階層性を認めてよいことになる。

25) 母はどうしても二人を呼びたいらしい。多実子の感情はだんだん意地わるくなってきた。本当は、母は二人を呼びたいのではなくて、ただ章之介だけに会いたいのだ。母には章之介と自由に会える機会はない。法事を口実にして、小松鉄太郎を呼ぶことをも口実にして、伊原章之介に会いたがっているに違いない。多実子は腹のなか

が熱くなってくるような気がした。母を章之介に合わせるくらいなら、自分は小松鉄太郎に会わなくてもいいから、母の邪魔をしたかった。
 (石川達三『自分の穴の中で』新潮文庫：39：G)

(26)は、固有名詞と普通名詞の間の階層性に関する例となる。願望表現の経験者が固有名詞、願望する行為の対象と願望を通達する相手が普通名詞で表現されている。

(26) 「しかし、それも警察の方でずいぶん調べたことなんですよ。その点も何も出なかったようです」
 それはそうかも知れなかった。警察では、被害者の様子から犯人の推定をつけようとしたに違いない。この主人の言う通り、何か変わったことがあれば警察に報告されたであろう。それが無いというのは、女中の申し立ても主人の言葉通りに違いなかった。
 しかし、添田は、一応、その女中に会いたかった。それを言うと、主人は快く承知した。
 「では、すぐここに呼びます。わたしは今言ったように組合の総会に出なければならぬので、これで失礼させていただきます」
 (松本清張『球形の荒野』文春文庫：上 141：G)

以上、(21)から(26)の例によって(27)に示す階層性を仮定することができる。

- (27) a. 三人称名詞 > 固有名詞
- b. 三人称名詞 > 親族名称
- c. 三人称名詞 > 普通名詞 (人間名詞)
- d. 固有名詞 > 親族名称
- e. 固有名詞 > 普通名詞 (人間名詞)

(27)の他に、親族名称と普通名詞との階層性が導入される可能性があるが、これを明示するための事例を得ていない。角田(1991)の「人間名詞」は、本稿の普通名詞に相当し、親族名称と普通名詞(人間名詞)の階層性は本稿と別の観点からは論証されていることになる。しかし、本稿の観点では、これを仮定するに十分な根拠を提示することができない。そこで、親族名称と普通名詞(人間名詞)は同じ階層に属するものと仮定しておく。

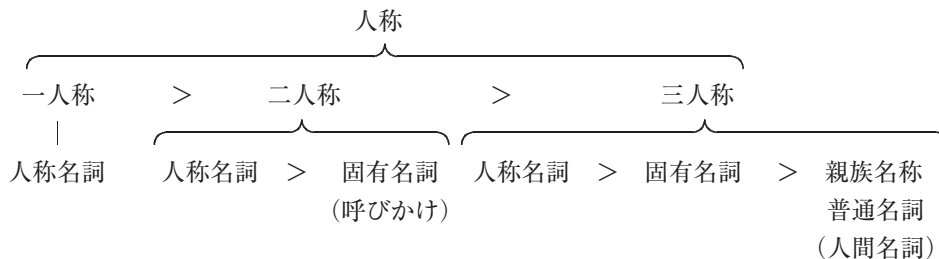
なお、テキストの各参加者間において、Zubin(1979)の仮定した(28)の階層性は有効である(野村2008)。

- (28) 中心的 > 周辺の

4.4 まとめ

以上のことから、先に提示した(12)は、階層性を明示することによって、(29)のように書き換えられる。これが、本稿の範囲で、コミュニケーションの参加者とテキストの参加者とがテキストに言及する様相の観点からとらえた、日本語の人称表現に認められる人称空間であり、左のものほど両参加者がテキストに言及する様相の近接していることを意味する。つまり、日本語の小説の地の文では、まず一人称・二人称・三人称という抽象的なレベルで階層性認められ、次に、各人称の具体的な表現のレベルで階層性が認められるということである。

(29) 日本語の小説の地の文における人称空間



5. むすび

前節で、小説においてそのテキスト全体または部分テキストの人称表現をとりあげ、テキストにおけるコミュニケーションの参加者とテキストの参加者の関係性の観点から、その階層性を一定の傾向として仮定した。その論証のなかで、テキストの参加者が、部分テキストにおいて中心的であるか周縁的であるか、という属性が要件となること、日本語においては描出表現がこの階層性を検討するために適切な表現類型であることを示した。また、着目したテキストの参加者について部分テキストの間で中心的か周縁的かという属性に揺れが生じたとしても、(29)の階層性そのものには影響を及ぼすことがないことも明らかにした。さらに、テキストによっては、文体論的な特性として、(29)の階層性に合致しない例が現実存在することも例証した。本稿で仮定した階層性は、これまで多様な観点から提案されてきた名詞類の階層性と概ね整合するものであるが、テキストのレベルでこれを検討し、一定の結論を導いたことに意義がある。ただ、本稿では演繹的な方法によってその階層性を導いており、一部については実証を保留している。今後、帰納的な観点からこれを証明する必要がある。また、個々の人称表現がテキストの展開においてどのように維持され、あるいは関係づけられていくのか、その過程を明らかにすることが求められる。本稿は、この問題を検討するための一階梯として提出するものである。

【注】

- 1) 人称名詞とは田窪行則 (1997) の語で、他言語の人称代名詞に対応する。日本語では、性数格の一致現象が認められないことから、これにかわる用語として導入されたものである。
- 2) 日本語に一人称・二人称・三人称を認める根拠と、その研究史については、野村眞木夫 (2005, 2006, 2007, 2008) で明らかにしている。ただし、三人称の範疇について通時的な観点は導入しない。他に、総称人称、無人称を認め、四人称、五人称は認めないこととする。総称人称とは、Jespersen (1933: 150) が「すべての人称を曖昧に包含するもの」と定義したもので、対象を集散的に指示する名詞によって表現される。無人称は、亀井秀雄 (1983: 15f) が「無人称の語り手」として「作中どこにでも (主人公の内面にまで) 自由に出入りできる作者自身とは必ずしも一致せず、つまり一応は区別された、その場面における自分の位置をそれなりに自覚している」と規定した概念による。本稿では、この二つは直接の検討の対象としない。なお、総称人称については、野村 (2000) の第4章の総称表現の概念との関連が深い。
- 3) 格成分が省略されているばあい、および「自分」がもちいられているばあいは、直前の同一指示成分の表現形式をもって復元するものとする。
- 4) 日本語で一人称を含むテキストにおいて描出表現が成立することについては、野村 (2000: 第5章第5節) を参照。
- 5) 原著では (76)。
- 6) 西田直敏 (1978) が「文体の様相的把握」と規定した領域に帰属する。

【参考文献】

- Dixon, R. M. W. 1979 "Ergativity." *Language*. 55- 1.
- 石坂正藏 1951 「敬語的人称の概念」『法文論叢』2 (北原保雄編 1978 『論集日本語研究9 敬語』有精堂所収)
- Jespersen, O. 1933 *Essentials of English Grammar*. George Allen & Unwin.
- 亀井秀雄 1983 『感性の変革』講談社
- 工藤 裕 2005 「文の機能と叙法性」『国語と国文学』82- 8.
- Kuno, S. and E. Kaburaki 1977 "Empathy and Syntax." *Linguistic Inquiry*. 8- 4.
- 南不二男 2002 「談話の性格と人称制限」『近代語研究11』武蔵野書院
- 西田直敏 1978 『平家物語の文体論的研究』明治書院
- 仁田義雄 1991 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 野口武彦 1994 『三人称の発見まで』筑摩書房
- 野村眞木夫 2000 『日本語のテキスト—関係・効果・様相—』ひつじ書房
- 野村眞木夫 2005 「日本語の二人称小説における人称空間と表現の特性」『上越教育大学国語研究』19.

- 野村真木夫 2006 「日本語の二人称小説における人称空間と表現の特性（2）—コミュニケーションとダイクシスの観点から—」『上越教育大学国語研究』20.
- 野村真木夫 2007 「テキストのタイプと人称のタイプ—願望表現と二人称小説を視座として—」『上越教育大学研究紀要』26.
- 野村真木夫 2008 「コミュニケーションの組織とテキストにおける人称— 人称の様相についての問題提起 —」『上越教育大学研究紀要』27.
- Siewierska, A. 2004 *Person*. Cambridge University Press.
- Silverstein, M. 1976 “Hierarchy of features and ergativity.” in Dixon, R. M. W. ed. *Grammatical Categories in Australian Languages*. Australian Institute of Aboriginal Studies.
- Silverstein, M. 1987 “Cognitive Implications of a Referential Hierarchy.” in Hickmann, M. ed. *Social and Functional Approaches to Language and Thought*. Academic Press.
- 田窪行則 1997 「日本語の人称表現」田窪編『視点と言語行動』くろしお出版
- 角田太作 1991 『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 渡辺 実 1991 「「わがこと・ひとごと」の観点と文法論」『国語学』165.
- Zubin, D. A. 1979 “Discourse Function of Morphology: The Focus System in German.” in Givón, T. ed. *Syntax and Semantics*. 12. Academic Press.

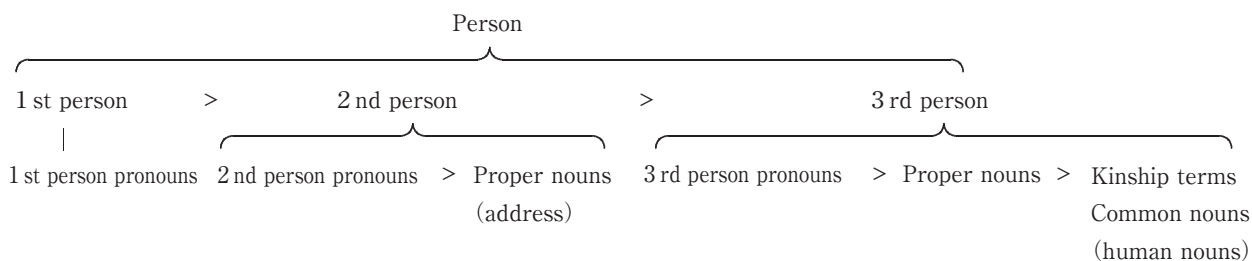
付記：本稿の一部は、2008年3月1日に行った平成19年度上越国語同好会例会での発表をもとにしている。

Personal Nominals in Japanese Text : Person Paradigm and its Hierarchy

Makio NOMURA *

ABSTRACT

In this article, first of all, we confirm the kind of the Japanese person expressions and the type of the novels regarding the combination of person. The problem is how Japanese person expressions are used in novels. The texts are investigated from the next viewpoints : 1) the person restriction; 2) the markedness of the predicates; 3) the centrality of the participant of text. Finally, we argue that the Japanese personal nominals have hierarchy, similar to universal hypothesis. Our hypothesis is as the following figure.



* Humane Studies and Social Studies Education